

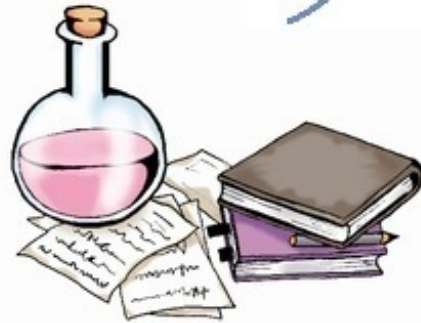
楽しい人生とは研究に

専念できる環境かもしれない

原題「人生の楽事」

読みやすさ重視

現代語訳、登場！



原作：福澤諭吉

訳した人：神無月 やよい

こんにちは。

この度も？ そして初めての方も、当作品をダウンロードして頂き、ありがとうございます！
諭吉氏の論説、現代語訳の第三弾です。

いつも通り、読みやすさを重視した面白おかしい路線でお送り致します。

今回のお話は、慶応義塾生向けに演説した内容を新聞記者が文字を起こし、記事にしたものです。

原文には、その旨が注意書きされています。

ですが、翻訳では、テンポが悪くなったので、その部分は訳さず、いきなり本題から入りました。

そして、本文の最後ですが、言葉が足りない気がしたので、後世に託す。といった趣旨を独自に追加させて頂きました。

※多分、意味あっていると思いますが、違った際はこちらyayoi.renraku@gmail.comへツッコミメールをよろしくお願いします。

以上、そのように加筆・編集した事をこの場にて、お知らせしておきます。

また、今回は中国思想や当時の金銭などについて触れています。

この件について、解説が必要だと思ったので、一作目のようにまえがきで解説しておきます。

時代の情勢について

こちらのお話をなさったのは、明治二十六年です。

地位や社会的にも相当なお偉いさんになっている。という事情もあったと思います。

ですが、恐らくは大政奉還を知らない世代が出てきたのではなかろうか？ と、私は勝手に推測致しました。

「ペリーとかマジ知らねえっす！」

「鉄道とかチョ～便利っすよね」

若い学生さんから、こんな感じの発言が出たら、時代の移り変わりを感じざるをえないかもしれません。

では、なぜ若かりし頃の昔話をしたのか？

その説明です。

ペリーさんが来日して、江戸幕府は鎖国を廃止したのは、四項目目の時代背景にて解説している通りです。

ジャイアン条約（日米修好通商条約）に危機感を感じて、愛国武士達が立ち上がりました。

実はこのエピソードには続きがあります。

彼らは、西洋文化を学ぼうとする学者や、渡米する官僚などをスパイではないか？

そう疑い、ちょっと過激ですが、問答無用で切り殺していたのです。

そこで諭吉氏は自分の命を守るために、この時ばかりは夜歩きをせず、英語でやり取りが出来る事を周りに隠していました。

【命あつての物種】

死んでしまつては、必要な事を後世に伝える事も出来ません。

こればかりは仕方ないですね。

ただ「西洋文化との交流＝国賊」と極端に毛嫌つた過激な維新志士の考えも、外国人を優遇して肝心の日本人を冷遇する。

現在の日本の政治状態を鑑みると、今ならちょっとだけ分かる気がします。

思想について

作中にて、たびたび天地創造や^{ことわり}理といったキーワードが出てきます。

平成の世である現在なら、地球が出来た経緯がなんだって？ となりますが、このときはまだ解明されていませんでした。

天地創造とは、ビックバンにより宇宙が誕生。

小さな^{いんせき}隕石がぶつかりあつて、地球と言う天体が出来上がつていった。

そして、生まれて間もない地球は、まだ大気が安定していません。

山はドッカンドッカン噴火して、雨もザーザー降りまくりです。

雨がやがて海となり、まずプランクトンが生まれます。

最終的には、魚やイルカ、草や木などの植物、人類などのとてもたくさんの生物が生まれました。

今回のお話は、それを完全に解明したい。といった趣旨をお話されています。

また、特に?? となるが^{ことわり}理だと思ひます。

グーグルさんに質問すると辞書や、[wiki](#)が表示されます。

そこから推察するに、理とはモノを盗んではいけない。

人は生まれた瞬間、死ぬ宿命を持っている。などの道徳観念について深く考えていく学問だと分かります。

まず一点目のなぜ他人のモノを盗んではイケナイのか？ について考えていきます。

これは元の所有者から恨みを買う危険性です。

大切なものを盗られたら、怒るのが人間という生き物です。

盗つた人が犯行前の状態のまま持ち主に返した上で、心から謝れば許してもらえるかもしれません。

ですが、開き直つたりゴメンナサイ。という言葉がないと問題がややこしくなります。

反省がみられない態度をとり続けると、被害者が強い怒りの感情から、最悪の行動を起こす可能性すらゼロではなくなります。

ゲームならば、フラグを立ててしまった状態ですね。

お互いにとって、バッドエンドの結末しか待っていないので、止めましょう。という考え方です

。 二点目の人間の宿命については、[鋼の錬金術師](#)というマンガがとても分かりやすいので、例に出します。

主人公が錬金術について修行する時にお師匠様から【一は全。全は一】を悟れという課題を出されるシーンがあります。

人間は魚やウシを食べ、生命を繋いでいるが、やがて老いて死ぬ。

その時、死体は土に還りますが、その土はプランクトンなどの栄養となり、植物がすくすく育っていく。

そして、その植物をウシが食べて、大きく育つ。

育ったウシを人間が食べる。

エンドレスループのこの状態が「ことわり理」です。

え？ まだピンとこない？

うーん。ネットショッピングや、電子書籍などで全巻大人買いして下さい(苦笑)

理以外にもかなり良い事がたくさん描かれているので、まだ読んでいない方はオススメです！

貨幣価値の違いについて

また、お話の最後にお金に関する話題が出てきます。

現代の貨幣価値とは、かなり違いますので、その違いをご説明しておきます。

明治時代の一円が、平成二十七年の現在では、だいたい二万円ぐらいの価値となっています。

※[国立国会図書館資料 過去の貨幣価値を調べるより](#)

原文の金額では、金額のすごさが伝わらないかもしれない。

そう考え、現代の貨幣価値に修正しました。

一応、その部分に計算した注釈文をつけましたので、よければご参照下さい。

それでは、長くなってしまいましたが、以上でまえがきを終わらせて頂きます。

引き続き、本編をお楽しみ下さい！

楽しい人生とは研究に専念できる環境かもしれない

人間は何かしら楽しむものを持っている。

例えば、旅行が好きな人。

家でゴロゴロする者。

生け花や茶道・舞踏などのお稽古を熱心に学ぶ者や、水墨画や^{こっとうひん}骨董品を集める事に、生きがいを見出す者など実にさまざまだ。

また、それ以外には、商いや株取引などで、お金を増やす事に余念がない人間もいれば、手柄を立てて出世する事を目的として、熱心に働く者もいる。

その他、千差万別限りなく人間が行う活動は、現代社会の人々がおのおの、その心を楽しもうとする働きであり、あるいは人間の楽しみではなく、^{こころざし}志とも言えるかもしれない。

(講演に参加した慶応義塾) 学生諸君にも、必ず何かしら楽しむ趣味や、目指している夢があるだろう。このような演説会の場にて、君らと出会い、テーマを語り合う事は、とても面白い事だ。

今回は、自分が若い頃から現在に至るまで、かつて一日も忘れず、ついには今日に至るまで、自分の思い通りにならなかった。

とても楽しく想像したモノについて語ろうと思う。

今をさかのぼる事、およそ四十年前。自分は儒学生だった。※儒学とは、中国の思想を研究する学問です。日本には飛鳥時代頃に伝わってきました。

二十代の頃、初めて西洋学問を学びたいと思い、まず手始めに物理学を学ぶ事にした。

しかし、これを良し。と喜ぶのは、とても難しかった。

どこかの学校に入学して、極めようとする熱意は十分だったが、当時の江戸時代後期は、敵味方が入り混じったカオスな治安状態だったので、なかなか許されるものではなかった。

特に自分の家は貧乏で、その日食べるご飯を買うお金の工面に忙しく、学問に専念できなかった。

また、開国以来の世の移り変わりを見れば、おのずから口を硬く閉ざしているしかなかった。その間は、本をたくさん書いて、時間が過ぎるのをただひたすら待っていた。されども、物理学の事は、ずっと自分の心の中から離れずにいた。

いよいよ面白くなり、一人の時は宇宙を創造した全能神の秘密を探るように考えていた。

ただ、これは暴いてはいけない気もするが、人間は探求したがる^{サガ}宿命を持っているから仕方がない。

蒸気や電気の力は、地球誕生の時より存在していたが、人間は暗く愚かで長い間、これを知らずにいた。

最近、ようやくその手がかりを探し始められた。

今後、さらに人間の知恵が進化するに従い、いよいよ神の力と思われるモノの本質を知る事が出来るかもしれない。

その時、知らなかった頃に思いをはせれば、ただ人間は愚かだったと悟るのみである。

また、同時にこれは学会の暗黒時代到来ともいうべき事態かもしれない。

このときにあたり、一心不乱に物理を探求して、天地創造の秘密を解明するのは、人類にはとてもつもなく素晴らしい喜びである。

それは王侯貴族が、富や名誉を羨む必要性をまったく感じないと言えれば分かってもらえるだろう。

言うなれば、神が天上界から我々、人間の生活を見るようなものなのかもしれない。

実に低俗な様子を^{あわ}憐れむと同時に、我が家の空想をたくましくする。

例えば、動植物それぞれの性質や、地球の仕組み。また、その天体との関係、科学の働きは果たしてそのいずれまで到達するのだろうか？

宇宙勢力の原則は、果たして既に決まりきっているのだろうか？

細かく考えれば、考えるほど疑問は際限なく湧き出てくる。

見渡す限り、あたかも天地創造の秘密に囲まれて、ただ人間の知恵の浅はかさを嘆くのみだが、いよいよ科学が進歩してその真理に達し、かつて底止めする所を知らずも、またこれ人生の約束なれば、勇気を奮い立たせて見識の区域を広め、あたかも創造主とその境界線を争うのは、これぞ学者の本領だと深く信じて疑わないであろう。

ことに我々、日本国民の性質を見るに、新しい西洋文明を知ったのは、ごく最近であるが知識の教育練度は、千百年以上も続く遺伝のものである。

新しい世界の^{ことわり}理を理解するには、苦しい思いをするだけでなく、ただ単に西洋を学ぶ段階は既に去った。

今は学問道場と一致団結して、今後は我々、学者が活動する場を大学に限定して、後輩の指導に当たっている。本当に日本国のとても心が躍る楽しいニュースだが、ただとても残念なのはその学者をもってしても、学業ただひとつに専念出来ない時が多い事だ。

なぜなら、どんな学者でも、その身体はユウガオで出来ている訳ではないからだ。

私たち人間は、衣類や食べ物を調達せねばならない。



※ユウガオの部分は、原題では匏瓜と表されています。画像の通り、ひょうたんのような形をした^{ウリ}瓜です。

中東アジアや日本の縄文時代では、これを二つに割り、中身をたべたあとに乾燥させ、お皿として使っていたようです。

参照元：跡見学園女子大学、農産譜より

しかるに生きていく方法を考えるのは、人生でもっとも煩わしい事であり、学者の活動を妨げる以外の何物でもないから本当に腹が立つ！

一人静かに座って、無限宇宙のそれより、原子レベルの小ささにいたるまで、その真理をとっても深く考え、働きを察して、たちまち理解したかと思えば、またすぐ見失ってしまう。

ぼんやりとして、一心不乱にまるで耳や目、鼻・口という人体の穴という穴がその活動を忘れるほど、研究に没頭している最中に突然、家計のやりくりを聞かされ、毎月の給料をもっと多くもらってこい！

などと叫ばれると、研究を一時中断せざるえない。

話が終わり、また元の研究作業に戻った時は、再び同じようなテンションで研究に没頭するのはとても難しい。

強いて例えるならば、ぐっすり眠っているところに、いきなり冷たい水を顔面にぶっかけられたようなものだ。

ごく普通の一般人には、さほど重要な事に感じられないかもしれないが、学者になってはじめてこの苦痛を思い知る事になる。

現在の実際において、政治家に哲学者はおらず、新聞記者に物理学の専門家は少ない。

学者が開業医師になるのは^{まれ}稀であり、説法をするお坊さんは道徳知識に優れているが、それは決して偶然ではない。

されば今、この学ぶ環境の妨害を除いて、熱心に学ぼうとするには、学者に衣食を提供して、生活の保障をするのがひとつの方法である。

この方法を実現させるにはどうしたらよいか？

ひたすら考えていた。

その答えのひとつが「研究に専念出来る施設や、教育機関を設立する法案を作ってもらおうよう政府に頼む」しかない。

ただ、今の政府は勉強しようともせず、しかも議員報酬でお高いブランド品を買い、豪華な食べ物を自由きままにむさぼり食った生活を送っている。

挙句の果てには、名誉や目先の利益を求める人物達とやたら交流している。

あまつさえ目に余る行いがある。それは私欲目当ての人物から^{だま}騙されて、催促を受ける事だ。

学問を研究する者にとって、それは無益以外の何物でもない。

仮に想像してみると、世間の思いつきでもって、私に寄付して下さる者もいる。

ただこれは善意なので、あくまで使い道は公共のために限定すべきであり、間違っても私が勝手に家計の足しにはいけない。

近く実利益を期待している出資者もいるかもしれないが、胸のうちでは本来の目的とはまったく違うものであろう。

私が今このような話をした本当の目的は、ここ（慶応義塾）に研究所を設けて、おおよそ五、六名から十名ほど学者を選び、生活に一生、困らない手段を授けて、学問以外の事を考える必要のない環境を整え、かつその学問の研究具合や、方法も本人の思うがままに任せて、横から口をいれず、その成績に対して、人や日本にとって有益なものかどうか？

すら問わず むしろ今の世にいう実利益に還元されるものかものを選んで、その研究内容の本質を極めれば、達成する事も可能だろう。逆に全く無駄なものを研究してしまう可能性もまたあるだろう。

研究内容次第では、担当者が一生かけても完成せず、やむなく次世代以降に渡って引き続き行っていくモノもあるだろう。

あるいはその人が病気の時に休職するのはもちろん、元気で気分によっては研究がはかどらず、やむなく一時的に中止することもありえる。

一生懸命、研究するか？

もしくはサボるかは、すべてその人次第である。

もっとゲスな事を言ってしまうえば、学者を好き放題に甘やかしている状態とも言えるし、国家が飼い殺している状態とも取れるだろう。

こんな風に、すべてに対して管理不届きすると、とても効果を実感する事は出来ないだろう。

そう感じる者が多いだろうが、元々、学者という人種は、学ぶ事を楽しみにしており、それは酒好きの人にお酒をもてなすようなものだから、自発的にこれを制限する事は出来ないだろう。いわゆる野放しとは、自主性を促す方便である。

むしろ、世間に存在している「口だけやたら達者な人間」を取り締まらない状態こそ、まことに学問や思想の成長を妨げる害虫と言えるだろう。

おおよそ、このぐらいの趣向にしたのならば、日本の学者もはじめて良くその基本的な性質を示すだろう。

つらく苦しい思いをしつつ、全身全霊でもって研究に励めば、ついに天地創造の秘密を発見して、世界中の物理学に驚きのニュースを聞かせることもあるかもしれない。

試しに実際にいくらかかるのか？

その費用を計算してみよう。

十名の学者に一年間二千四百万円を支給すると、合計二億四千万円である。

※計算は千二百円×二万円×十ヶ月です。

なお、どうも夏や冬など含め、年間で二ヶ月ほど休暇があり、その間は無支給だったかもしれません。

この種の学者は世間との交流も少なく、身だしなみや部屋が散らかっていようが全然、気にしない。

世間とも独立して他を顧みない状態は、まるであたかも仙人のような暮らした。

だから、年間二千四百万円の支給でも十分と言える。

その他に一人あたり、おおよそ四百から六百万円の生命保険を毎年かけ、学者の家族が安心して暮らせるよう手配する必要もある。

トータルで学者にかかる金額は、おおよそ三億円として、あまった際は研究費用に活用すればよいだろう。

かかる費用を言い出せばきりが無い。

仮にまず、本格的な研究費を七億円とすれば、生活費・保険の掛け金と合わせて考えると、毎年十億円程度かかる計算だ。

※計算は三万五千円×二万円です。

まあこのように軽く計算してみても、選んだ十名の学者の中には、病気や事故で亡くなる者もいれば、飽きて途中で辞めていく者もいるだろう。

もしくは、非常によくはない事だが、給料だけもらって遊びほうける者も出てくるだろう。

十名全員がそれぞれ足並みそろえて、ひとつの内容を研究するのは、人間が感情を持っている以上、絶対に無理な注文である。

せいぜい五名から三名ぐらいが、確固たる信念でもって熱心に研究してくれば上々と言えるだろう。

頭脳がズバ抜けて優れているたった一人の学者が、全世界を動かした例もある。

学問に期待する所は、ただどこまでも奥深く、追求してもしきれない無限の可能性にある。

以上の話は、自分が若かった時より考えていた事であるが、誰かに話すのは無意味だと理解していた。

だからこそ、心許せる親友以外には、絶対に話した事がない。

しかし、人生どのようになるかは神のみぞ知る事なので、万が一、自分でも叶^{かな}えられない出来事が起こりえるかもしれないから、人知れずこの話を書き残す事も考えた。

だが、結局のところ、ボケ老人のたわごとであり、とうてい一生かなうわけがない。と思い直し、あえて書き残さなかった。

けれど、今（講演に）参加している学生諸君は、まだ若い。

生きていく中で、たくさんのつらい事や、うれしい事、楽しい事に出会うのは、神が決めた確定事項である。中には、^{ぼくだい}莫大な遺産を相続したり、宝くじが当たって大金持ちになり、服や食事に困る事がない生活を送る学生もいるだろう。

そうなった時は、別の人生を楽しみに求めるのが、悲しいかな。人間と言う生き物だ。

特に異性とえっちな事を沢山して経験豊富になろうとする者もいるだろう。

今回の企画を聞いて、この話を思い出したので、何か面白い話が出来そうだと思います、話してみた次第である。

もしも、私が生きている間に天地創造の秘密を明かしたニュースを聞けば、とても喜ぶだけでなく、たとえ私が死んだ後でも、墓の前で報告してくれば、あの世から大絶賛の声を送り、親友の美学に感激の余り涙を流すだろうから、あとは若い諸君らに任せる事で、今回の講演を締めくくりたいと思う。

初出：「時事新報」時事新報社　〔十一月十四日〕

原題『人生の樂事』

左の一編は十一月十一日府下芝區三田慶應義塾に於て福澤先生の演説したる其大意の筆記なり。 人には何か楽しむ所のものなかる可らず。 旅行を好む者あり、閑居を貪る者あり、遊藝を嗜む者あり、書畫骨董を悦ぶ者あり。 尚ほ之より以外には財産の増殖に餘念なき者もあれば、功名利達に熱心なる者もあり。 其他千種萬様限りなき人事の運動は、浮世の人々がおの／＼其心を樂しましめんとするの働にして、或は之を其人の楽しみとも云へば又は其志とも云ふ。 諸君にも必ず何か楽しむ所、志す所のものある可し。 折々は相會して之を語り之を論ずるこそ面白けれ。 今晚は老生が壯年の時より今に至るまで曾て一日も忘れたることなくして、遂に今に至るまで意の如くならざりし一快樂事の想像を語るに、老生は本來儒學生にして、今を去ること四十年、年齢二十の頃、始めて洋學に志し、其入門は物理學にして、之を悦ぶこと甚だしく、何か一科の専門に入りて爲すことあらんと熱心は萬々なれども、時勢の許さざる所にして、家に資力もなく、朝暮衣食の計に忙くして心を專一にすること能はざるのみか、開國以來の世變を見れば自から黙止す可きにも非ず、色々の著述などして時を費したることも多し。 左れども物理學の一事は到底心頭を去らずして、之を思へばいよ／＼面白く、獨り心に謂らく、造化の祕密、誠に祕密なるが如くなれども、化翁必ずしも之を祕するに非ず、人の之を探究せざるが故なり。 蒸氣電氣の働は開闢の初より明に示す所なれども、人間の暗愚なる、久しく之を知らずして、漸く近年に至り始めて其端緒を探り得たるのみ。 今後とても人智の次第に進歩するに従ひ、いよいよ之を探りていよ／＼之を知り、其知り得たる上にて未だ知らざる時のことを思へば、唯人間の暗愚なりしを悟るのみにして、今日は學界尚ほ暗黒の時代と云ふも可なり。 此時に當り一意専心、物理を探究して、造化の祕密を開くは人間無上の快樂にして、王公の富貴榮華も羨むに足らず。 之を眼下に見て其生活の卑俗なるを憐むと同時に、自家の空想を逞し、例へば動植物生々の理、地球の組織又その天體との關係、化學の働は果して何れの邊にまで達す可きや、宇宙勢力の原則は果して既に定まりたるや否や、など仔細に之を思へば千百の疑問際限ある可らず。 満目恰も造化の祕密に圍まれて唯人智の淺弱を嘆ずるのみなれども、いよ／＼進んでいよ／＼深きに達し、曾て底止する所を知らざるも亦是れ人生の約束なれば、勇を鼓して知見の區域を擴め、恰も化翁と境を争ふは是れぞ學者の本領なりと深く信じて之を疑はず、殊に我日本國人の性質を見るに、西洋文明の新事を知りしは輒近のことなれども、知識の教育練磨は千百年來生々の遺傳に存して、新事の理を解するに苦しまざるのみか、起首原造の天資に乏しからずして、洋學開始以來單に西洋を學ぶの時代は既に経過し、今は學問場裡に彼我併立の勢を成して、今後我學者の勉る所は唯彼れに對して先鞭を着るに在るのみ。 實に日本國の一大快事なれども、唯こゝに遺憾なるは其學者をして一意専心ならしむるの手段に就て意の如くならざるもの多きの一事なり。 如何なる學者にても其身 匏瓜^{はうくわ}にあらざれば衣食の計なきを得ず。 然るに生計は人生に最も煩はしくして、學者の思想を妨ること之より甚だしきものある可らず。 獨坐沈思、宇宙無邊の大より物質微塵の細に至るまで、其理を案じ其働を察し、乍^{たちまち}得たるが如くにして又乍ち失ひ、恍として身躬から其身の在る處を忘れ、一心不亂、耳目鼻口の官能も殆んど中止の姿を呈したる其最中に、突然家計鹽噌の急に促され、金錢受授の俗談に叫ぶるゝが如きありては、思想の連鎖一時に斷絶して又舊に復するを得ず。 之を喩へば熟眠、夢方に酣なるのとき、面にザブリと冷水を注がれたるが如く、殺風景とも苦痛とも形容の詞ある可らず。 世間一般の人は左程に思はざる可けれども、唯學者にして始めて此苦痛の苦味を知る可きのみ。 今日實際に於て政治家に哲學者なく、新聞記者に物理學の専門家少なく、開業醫師に學醫稀にして、説法僧に善知識を見ざるも、自から偶然に非ず。 左れば今この學思の妨害を除て專一ならしめんとするには、學者に衣食の資を給して物外に安心せしむるの一法あるのみにして、竊に其方法を案ずるに、法律規則を以て組織したる政府の筋には固より依頼す可らず。 今の不學なる俗政府の俸給などに衣食し、俗物に交はり、俗言を聞き、甚だしきは其俗物の干涉を被り、催促を受けながら、學事を研究せんとするが如き、其無益たるは云ふまでもなく、假令ひ或は世間有志者の發意を以て私に資金を給せんとする者あるも、其これを給するや公共の爲めにも私の爲めにも近く實利益を期するが如き胸算にては、本來の目的に齟齬するものなり。 老生が眞實の目的を申せば、爰に一種の研究所を設けて、凡そ五、六名乃至十名の學者を撰び、之に生涯安心の生計を授けて學事の外に顧慮する所なからしめ、且その學問上に研究する事柄も其方法も本人の思ふがまゝに一任して傍より喙を容れず、其成績の果して能く人を利するか利せざるかを問はざるのみか、寧ろ今の世に云ふ實利益に遠きものを選んで其理を究め、之を究めて之に達せざるも可なり、之が爲めに金を費して全く無益に屬するも可なり、其人の一生涯に成らざれば半途にして第二世に遺すも可なり、或は其人が病氣の時に休息するは勿論、無病にても氣分に進まざる時は業を中止す可し、勤るも怠るも都て勝手次第にして、俗に云へば學者を飼放し又飼殺しにすることなり。 斯の如くすれば萬事不取締にして逆も實效を奏

することなしと思ふ者こそ多かる可けれども、元來學者の學を好むは酒客の酒に於けるが如くにして、傍より之を制す可らざるのみか、自から禁ずること能はざる所のものなれば、所謂飼放しは其勉強を促すの方便にして、俗界に喋々する規則取締等こそ眞に學思を妨るの害物なりと知る可し。凡そ此邊の趣向にしたらば、日本の學者も始めて能く其本色を現はして辛苦勉強、心身の力を盡し、遂に造化の祕密を摘發して世界中の物理學に新面目を開くこともある可し。試に實際の費用を概算するに、十名の學者に一年千二百圓を給して共計一萬二千圓（此種の學者は世間に交際も少なく、衣食住の邊幅を張らんとするが如き俗念もなく、物外に獨立して他を顧みざること恰も仙人の如き者なれば、一年の生計千二百圓にて十分なる可し。）此外に一名に付き毎年凡そ二、三百圓を生命保險に掛けて死後の安心を得せしむるの要もあれば、學者の身に費すもの凡そ一萬五千圓として、他は研究の費用なり。其高は際限なきことなれども、假に先づ三萬五千圓とすれば、兩様合して五萬圓を毎年消費する勘定なり。或は右の如く計畫しても、十名中に死する者もあらん、又は中途にして研究所を脱する者もあらん、又は不徳義にして怠る者もあらんなれども、十名共に全璧ならんことを望むは有情の世界に無理なる注文にこそあれば、十中の五にても三にても、前後節を改めずして確乎たる者あれば以て足る可し。一人の學力能く全世界を動かすの例あり。期する所は唯その學問の高尙深遠に在るのみ。以上の趣向は老生が壯年のときより想像する所にして、人に語るも無益なるを知り、一、二親友の外に口外したることもなく、人生の運命は計られず、萬に一は自分の身に叶ふこともあらんかと獨り竊に夢を畫きたることもなきに非ざれども、畢竟癡人の夢にして、逆も生涯に叶ふ可き事に非ず。左れば今滿堂の諸君は年尚ほ^{わかし}少、一生の行路に幾多の禍福に逢ふは必然の數にして、或は大資産の身と爲り、衣食餘りて別に心身の快樂を求め、特に大に好事心を逞ふせんとして其方法を得ざるが如き境遇に際することもあらんには、むかし／＼明治二十六年十一月十一日慶應義塾にて云々の演説を聴きしこともありと、之を思出して何か面白き企もあらば、老生の生前に於て之を喜ぶのみならず、假令ひ死後にても草葉の蔭より大賛成を表して知友の美舉に感泣することある可し。〔十一月十四日〕初出：「時事新報」時事新報社

1893（明治26）年11月14日発行

福沢諭吉氏と時代背景について



【人物紹介】

江戸 天保五年一月十日生まれー明治三十四年二月三日没（満六十六歳）

死ぬまで奥さんだけを愛し、九人の子沢山な家庭を築いた。

少子化？ 何それ？ な大家族パパ。

日本で知らない人はいない。

それほど知名度が高い人物。

多分、彼が嫌い！という人は、そんなにいないのでは……？

彼を描いた紙幣を多く持つのが、世間でのステータスと認められる事から、詐欺や殺人など犯罪に走る人が今も絶えない。

時には、彼を巡って親族間で、争いが発生する事もしばしばである……。

^{おれ}
「俺、モテすぎてつらいわ〜」

あの世でお弟子さん達にそうぼやいているとか、いないとか？

福沢氏は、江戸～明治のまさに歴史の転換期を生きた教育者です。

武芸の達人でしたが、そちらよりも他人に教える事に喜びを見出した方です。

ユーモアたっぷりな人柄で、教えるのが上手い。そう、ちまたで評判だったのを江戸幕府が聞き、ヘッドハンティングを行い、専用の塾を開きます。

これが後の慶応義塾大学となります。

子供時代は、神社のご神体をその辺に落ちてる石とすり変えてみたり……かなりやんちゃで、恐れ知らずな性格でもあったようです。

散髪が嫌いで酒好きな性格でもあったらしく、困った母親が「散髪終わった後、酒を飲ませてやろう」そう取引を持ちかけたエピソードもあります。

苦肉の策だったのでしょうが、まだ内臓器官が発達していない子供にアルコール与えるお母さんも十分、柔らかい思考の持ち主です……。

【時代背景】

続いて、このお話が発表された時代背景を紹介します。

じゃないと、あまりの前時代っぷりに『石器時代か！？』とツッコミ入れたくなりますので……。

まず、幕末当時は、現在のような年中無休。

二十四時間営業のコンビニやスーパーはありません。

江戸や大阪など、その他地方のお城の城下町を中心に栄えています。

コンビニがない代わりに、今で言う百円の回転寿司や吉野屋のようなファーストフード系（マクドナルドやケンタッキーはないです）の外食産業が結構、繁盛しています。

にぎり寿司一貫がおにぎり大サイズで、お値段百円ぐらいで食べられました。

男性は自炊せずとも困らなかったようですね。

我が世の春とばかりに二百五十年以上、平和を楽しんでいた江戸時代ですが、かの有名なペリーさんが黒船に乗ってやってきます。

幕府はのらりくらりとアメリカの要求を交わし続けましたが、いよいよ逃げ切れない！

そう限界を感じて、限定的に鎖国を解除させますが、あとは学校で習った通りです。

「俺、社長！ お前、^{おれ}奴隷な？」

そう言わんばかりのジャイアン条約（日米修好通商条約）をアメリカが要求してきます。

これに危機を感じて、立ち上がったのが、武士の人達です

『幕府の連中、脳みそが腐ってやがる。平和が長すぎたんだ……』

そんな思いを抱いたかは知る由がありませんが、国を思う人達が幕府を歴史の表舞台からひきずりおろし、諸外国に対抗できるよう急ぎ、明治政府を立ち上げました。

最後は余談となります。時の明治天皇陛下が、二千年の歴史ある日本文化の衰退を心配なさり、ある方針を政府通じて、発表なさいました。

知る人ぞ知る。あの【^{きょういくちよくご}教育勅語】です。

私のオススメは口語訳がとてもしっかりやすかった杉浦重剛氏著書の【昭和天皇の学ばれた^{きょういくちよくご}教育勅語】です。

ご興味ある方はぜひ、図書館などで借りたり、書店で取り寄せてみて下さい。

また、産経新聞社が^{きょういくちよくご}教育勅語をもとに作られた学校授業【修身】内容について、出版しております。

小学校一年～三年用、四年生～六年生の二冊です。

内容は日本人としての美德やら、発展に貢献したエライ方の紹介です。

現代ならば、東日本大震災でとっさに高台に避難するよう助け合った。

おかげでみんな助かることが出来た！ そんなエピソードで、道徳観念を教えていた感じですよ。

修身の復活は議論として上がっていますので、大人の方なら読んでおいて損はない二冊でしょう

。

お子さんが授業で習った時に、パパやママは知らないの？ そうツッコミを受ける授業格差は十分、あり得るだろう。私自身はそう考えています……。以上で、当時の時代背景など説明を終わります。

あとがき

今作も、最後までお付き合い頂き、まことにありがとうございました。
訳してみても、思ったのですが、講演内容とタイトルが、ちょっとかけ離れている印象を受けました。
このあたりは、講演に参加していた記者さんのセンスかもしれませんね。

諭吉氏は、日本に西洋式お金の計算方法を広めたり、英語だけでなく多方面に渡って、日本を強く、たくましい国家に発展させた偉大な功労者ですが、同時に悪習慣も根付かせてしまったのではないだろうか？
とある万能細胞の捏造^{ねつぞう}論文騒動や、与野党問わず、支援団体からの寄付で大荒れの国会中継を見聞きして、ふと思ってしまいました。

いつの時代でも、悪人は滅びぬ！ 何度でもこりずに現れてやる！！ と、いう奴なのかもしれませんね(苦笑)
今回のお話を訳し、思わず人間の本質や、現在の日本国家の政治体制を考えずにはいられませんでした。
それでは、また次回、なにかの作品でお会いできればうれしいです！

感想や次回作などのリクエストを[こちら](#)で受け付けております。
何かご不明な点があった際や、確かかつ数日以内にお返事が欲しい方は、恐れ入りますがこちらのメールアドレス yayoi.renraku@gmail.comまでご連絡をお願いします。

平成二十七年 春の息遣いが聞こえ始めてきた三月の初め
神無月やよい

翻訳した人について



神奈川県在住。趣味は読書と散歩。生態は、主に右側を好んでのんびり泳いでいる。
三日坊主な性格なので、ブログやツイッターは滅多に更新しない。
数年前から自作小説をネットで公開し始め、現在は自サイトをのんびり運営中。
サイトが気になった方はこちらからどうぞ→[神無月やよい作品集～文字が織りなす物語～](#)